

(参考) ミニトマト病害虫防除薬剤一覧

1 殺虫剤

【令和2年4月1日現在】

対象病害虫	薬剤名	安全使用基準			備考
		希釈倍率	収穫前日数 (～まで)	使用回数 (以内)	
アブラムシ類 コナジラミ類	ダントツ粒剤	1g/株	育苗期	合計1回	株元処理
ハモグリバエ類		1～2g/株	定植時		植穴処理 土壌混和
コナジラミ類 ハモグリバエ類	スタークル粒剤	1～2g/株	育苗期	1回	株元散布
アブラムシ類		1～2g/株	定植時	1回	植穴土壌混和
	1g/株				
アブラムシ類 コナジラミ類	アドマイヤー1粒剤	1～2g/株	定植時	1回	植穴土壌混和
	チェス顆粒水和剤	5,000倍	前日	3回	100～300L/10a
アザミウマ類	モスピラン顆粒水溶剤	2,000倍	前日	3回	100～300L/10a
アブラムシ類 コナジラミ類	サンクリスタル乳剤 注1)	300倍	前日	—	150～500L/10a
トマトサビダニ ハダニ類 うどんこ病		300～600倍			
ネコブセンチュウ	ネマトリンエース粒剤	15～20kg/10a	定植前	1回	全面土壌混和
オオタバコガ ミカンキロアザミウマ ナミハダニ トマトサビダニ	コテツフロアブル	2,000倍	前日	3回	100～300L/10a
オオタバコガ トマトサビダニ コナジラミ類 ハモグリバエ類	アフアーム乳剤	2,000倍	前日	5回	100～300L/10a
アオムシ コナガ	エスマルクDF 注2)	1,000～ 2,000倍	発生初期 但し収穫前日	—	100～300L/10a 若齢幼虫期に散布
ヨトウムシ オオタバコガ		1,000倍			

※ トマトサビダニは、病害と間違いやすいので注意する。

◎農薬を使用する際、袋やビンに記載されている使用方法、回数を必ず守る。

2 殺菌剤

対象病害虫	薬 剤 名	安全使用基準			備 考
		希釈倍率	収穫前日数 (～まで)	使用回数 (以内)	
灰色かび病 葉かび病	ベルコート水和剤	6,000倍	前日	2回	100～300L/10a
	ゲッター水和剤	1,500倍	前日	3回	100～300L/10a
菌核病					
灰色かび病	ロブラール水和剤	1,000～1500倍	前日	3回	100～300L/10a
斑点病 輪紋病		1,000倍			
葉かび病	トリフミン水和剤	3,000～5000倍	前日	5回	100～300L/10a
すすかび病		3,000倍			
うどんこ病	カリグリーン	800～1,000倍	前日	—	100～300L/10a 発生初期に散布
灰色かび病 葉かび病		800倍			
灰色かび病	ボトピカ水和剤 注3)	2,000～ 4,000倍	発病前～ 発病初期	—	100～300L/10a
輪紋病 疫病	Zボルドー 注4)	400～600倍	—	—	100～300L/10a 予防剤
すすかび病		500倍			

※ 「すすかび病」は葉かび病に登録のある薬剤も含めてローテーション防除を心がける

<注意事項>

注1) サンクリスタル乳剤は、対象害虫の気門を覆うことで窒息死させる薬剤のため、かけムラがないよう注意する。残効がないため7日程度の間隔で2回以上散布する。また、展着性が優れるため展着剤を加用する必要はない。

注2) エスマルクDFは、対象害虫の若齢幼虫期に時期を失せず散布する。薬剤が付着した植物体を対象害虫が食害すると、2～3時間で摂食活動を停止するが、死に至るには2～3日を要する。野菜類で登録あり。

注3) ボトピカ水和剤は、保護作用による予防効果で対象病害を抑制するため、薬剤散布は発病前～発病初期に7～10日間隔で散布する。低温条件では効果が出にくいので、10℃以上が確保される施設内で使用する。野菜類で登録あり。

注4) Zボルドーは果実が汚れるため、使用時期に注意する（展着剤：ブレイクスルーの使用により汚れの軽減が可能）。

※ 育苗期の農薬散布回数もカウントされるので注意する。

※ 同一薬剤の連用を避けること。

◎農薬を使用する際、袋やビンに記載されている使用方法、回数を必ず守る。